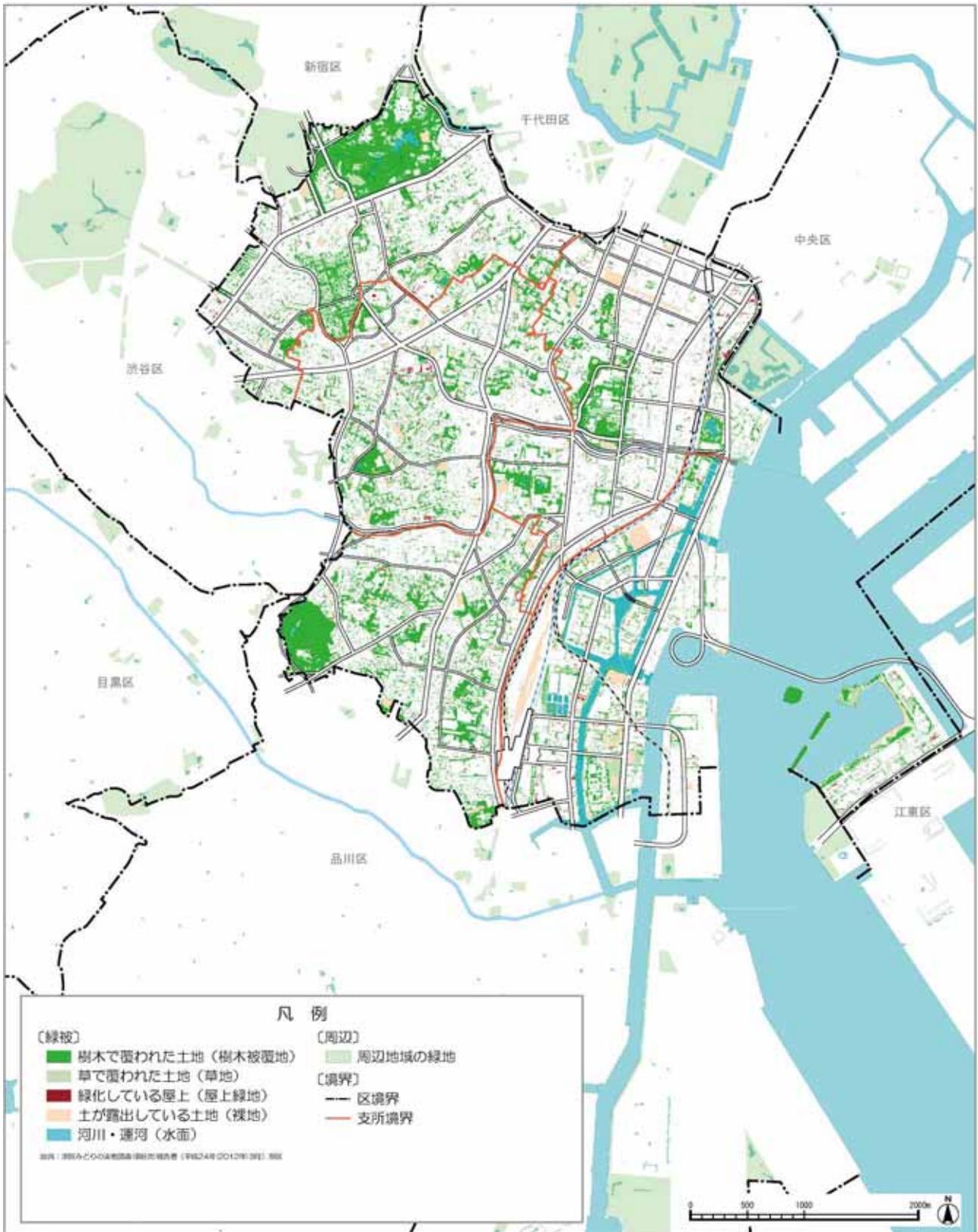


7 巻末資料

- (1) 港区の緑被等の現況
- (2) 目標種一覧（参考）
- (3) 隣接区のエコロジカルネットワーク図
- (4) 公共施設・民間施設の生物多様性緑化参考事例
- (5) 生きものごよみの例
- (6) 港区で確認されている外来種（植物）
- (7) 支援制度
- (8) 用語集

(1) 港区の緑被等の現況

参考：港区の緑の状況（港区みどりの実態調査 第8次：平成24年より）

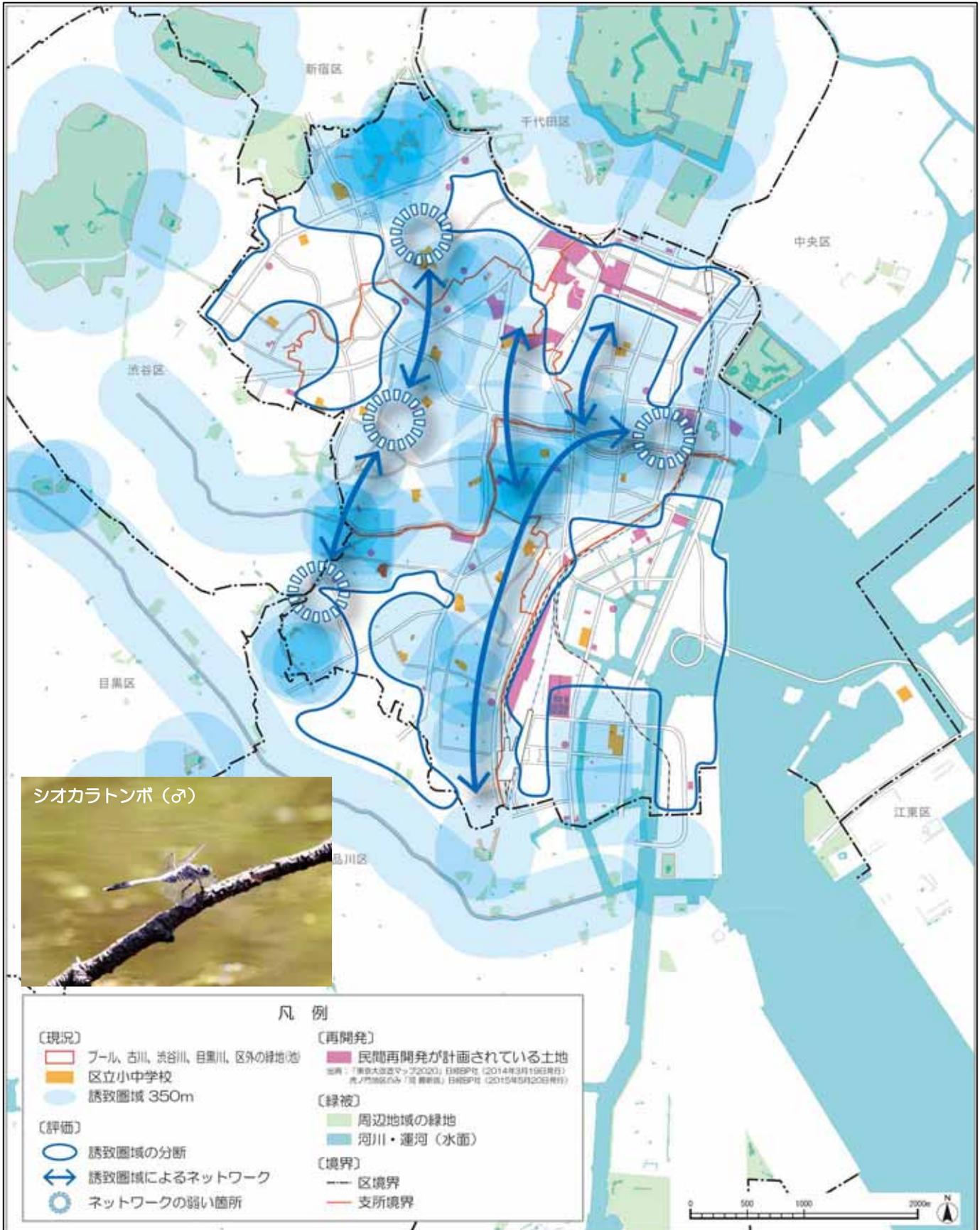


（緑の状況は、「港区みどりの実態調査 第8次：平成24年」より作成）

参考：シジュウカラを対象としたエコロジカルネットワークの現況と課題図（1ha 以上樹林と誘致圏域）（緑の状況は、「港区みどりの実態調査 第8次：平成 24 年」より作成）



参考：トンボ類を対象としたエコロジカルネットワークの現況と課題図（池、プール、河川と誘致圏域）（緑の状況は、「港区みどりの実態調査 第8次：平成24年」より作成）



参考：チョウ類を対象としたエコロジカルネットワークの現況と課題図（緑被率 10%未満のエリアにおける緑被の確保）（緑の状況は、「港区みどりの実態調査 第8次：平成 24 年」より作成）



(2) 目標種一覧 (参考)

①シジュウカラ

シジュウカラの 生息環境等	港区内での確認状況 区民のふれあい状況	関連する文献・論文による主な留意事項	計画立案への反映事項	設定理由等
<p>◆シジュウカラ</p> <ul style="list-style-type: none"> 樹木・樹林地 緑の多い市街地 幅広い樹林タイプに適応し採餌活動を行い、繁殖期は特に大量のチョウ目幼虫など葉食性昆虫を食べます。 ジェネラリスト或いは疎林性、林縁性の種といわれ、点在する樹木を利用できるために都市でも生息が可能です。 	<ul style="list-style-type: none"> 四季を通じて、区内各地で確認されている (港区生物現況調査 (第2次)などによる) 区民調査対象種 	<ul style="list-style-type: none"> 「エコロジカル・デザイン」(いきものまちづくり研究会 1992) P47 シジュウカラの行動圏は直径 100~200m ぐらい 「都市のエコアップ調査報告書」(生態計画研究所 1996) 東京都心での調査結果から、シジュウカラの行動圏は 0.385~10ha。 シジュウカラの 1 つがいが生息するに緑地面積 1ha が必要 「ロジスティック回帰をもちいた都市におけるシジュウカラの生息環境適合度モデル」(橋本、夏原 (2002) : 日本造園学会大会論文集) 大阪府の市街地においてシジュウカラの生息確率が 0.5 以上になるには、半径 200m 円内に 4.0ha(32%)以上の樹木が必要である。 「いのちの森」(森本幸裕・夏原由博 2005) P359-360 大阪の都市緑地での鳥類相調査結果から、半径 250m の円内に 1.8ha(9%)~6.0ha(31%) の樹冠面積がシジュウカラの生息に必要とされた。 森林域のシジュウカラのなわばり面積は森林域では約 1ha とされるが、都市域ではなわばり外でも採餌を行い、行動圏は約 3ha になると報告されている。 シジュウカラは 1ha 前後の樹冠面積で営巣するが、そのような場所では持続した繁殖地とはならず、局所的な絶滅と周囲からの侵入が繰り返されているものと考えられる (東京やイギリスでの報告例)。 「都市の景観構造と鳥類の生態」(橋本、夏原、森本(2006) : 景観生態学 10(2)P65-70) 高層建築物で分断された緑環境では単位面積 (樹木量) あたりに形成される鳥のなわばり数が減少することがあると考えられる。(新宿超高層ビル街や大阪府立大学構内でのシジュウカラ観察例) 「大阪市中心部の街路樹と越冬期の鳥類の出現状況の関係」(一ノ瀬友博 (2006)) ハシブトガラス、ヒヨドリ、キジバト、メジロ、ムクドリ、シジュウカラ、ツグミの 7 種の個体の出現は 2ha 以上の緑地から 300m 以内の範囲に集中していた。 「生物多様性に配慮した都市緑地の設計手法」(松原、杉本、寺井、赤川(2014) : 大林組技術研究所報) 港区、目黒区、新宿区 6 箇所の公園・緑地でのコゲラ、シジュウカラ、メジロの調査結果から、コゲラは 0.5ha 以下の緑地では出現がなく、シジュウカラ、メジロは 0.5ha 以下の庭園でも確認された。 シジュウカラはメジロと比べると繁殖期に多く観察され、越冬期に少ない傾向がある。 	<p>【供給地や拠点での要件】</p> <p>1ha 以上 (但し、シジュウカラは街路樹や河川沿いの並木などでも繁殖する例がある)</p> <p>【回廊の要件】</p> <p>樹林性鳥類の移動路としては外敵から身を隠すことができるある程度の幅を持った緑地帯が望ましい。 (鳥類では、樹冠が連続した回廊でなくても、途切れ途切れの飛び石状の回廊でも利用する)</p> <p>【点在する緑の要件】</p> <p>行動圏内の小規模な緑 (新宿区の例ではマンションのランダのプランターにも採餌にやってくると言われている)</p> <p>【移動分散の距離の目安】</p> <p>2ha 程度以上の大きな緑地があればその周辺約 300m の範囲をシジュウカラはじめ都市における主な鳥類がよく利用する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 樹木の幹や枯れ枝の中にいる昆虫を餌とする都市に見られる野鳥はシジュウカラ、コゲラしか見当たらず、コゲラの生息数はさらに少ない。 都市における複雑な食物網、言い換えれば健全な生態系を指標する種としてシジュウカラが妥当と考えられる。 核となる緑地と地域の緑被率の条件に応じて見られる種であり、区内ではみられる地域と見られない地域に分かれる。

◆参考 (樹林性の鳥類) シジュウカラ以外にも港区内では、メジロ、ウグイス、コゲラなどが目標種の候補となります。



シジュウカラ



メジロ



ウグイス

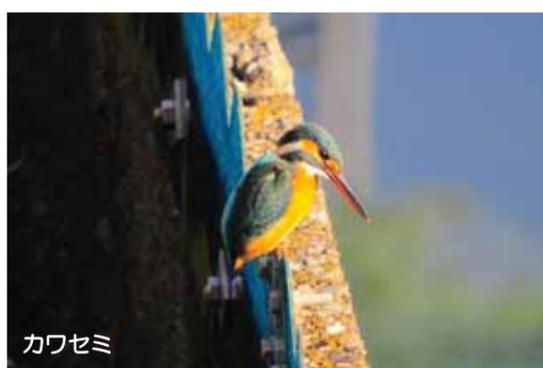


コゲラ

※P54 に、港区におけるシジュウカラを対象としたエコロジカルネットワークの現況と課題を示しました。

②カワセミ

カワセミの生息環境等	港区内での確認状況 区民のふれあい状況	関連する文献・論文による主な留意事項	計画立案への反映事項	設定理由等
<p>◆カワセミ</p> <ul style="list-style-type: none"> 水辺地 絶滅の危機が増大している種(東京都 RDB) 魚食であるがヤゴ、オタマジャクシ、エビ、時には成虫のトンボまで食べる。 東京都 RDB：絶滅危惧Ⅱ類 	<ul style="list-style-type: none"> 旧芝離宮恩賜庭園、自然教育園など 東京都江東区にある清水建設技術研究所内においてもピオトープの整備によって採餌のために飛来したカワセミが確認されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 「東京産鳥類目録2000 東京都の繁殖鳥代表50種」 http://www.yatyou.com/tokyotyouruimokuroku2000/top.html 留鳥として公園・庭園などの池、多摩川及びその支川の野川などに広く生息し繁殖している。1970年代までは数を減じ生息地が奥多摩地区まで後退していたが、80年代に復活し、1988年から自然教育園で繁殖が続けられるようになった。90年代では23区ほとんどで生息が記録されるようになった。 「皇居の生物相調査(第Ⅱ期)の結果について」(独立行政法人国立科学博物館 2014 プレス) カワセミの繁殖調査：カワセミの繁殖はこの4年間に5回行われ、成功したのは2009年の2巣のみで、巣立ちヒナ数は13羽程度だった。この10年間でカワセミの繁殖回数や巣立ちヒナ数が大幅に減少しており、営巣地の壁の崩落が進んだことと併せて、繁殖期に都心に生息するカワセミが減少している可能性も考えられた。 「道路空間を活用したエコロジカルネットワークの計画手法に関する研究」(川上、角湯、並河、竹井、小菅(2001)：土木計画学研究・講演集 No.24) 横浜市北部地域を対象としたケーススタディにおいて、コアエリアの「水辺・湿地性」の環境形成の目標種としてカワセミが設定されている。 「試行錯誤のカワセミ繁殖研究24年」(矢野亮 2012) ユリカモメ No.684 1988年自然教育園内でゴミ捨て場として掘った穴が繁殖地となり、以降2012年までに11回の繁殖があり。60羽の雛が巣立った。2010年から2012年までに繁殖の記録はない。 「帰ってきたカワセミ」(矢野亮 1996) カワセミが繁殖するためには、雛の孵化後に小さな魚類が不可欠となる。自然教育園の調査結果から、金魚など園外に出かけて餌を採っている。 	<p>【供給地や拠点での要件】 河川や掘削地などの土の面に営巣、採餌に来る池や水辺 (野川喜多見周辺におけるカワセミ護岸などの例など人工巣による誘導例は多数)</p> <p>【回廊の要件】 採餌できる池や河川と繁殖できる場所は近接していることが望ましい。移動経路は規模のある緑地内、河川の水辺など</p> <p>【点在する緑の要件】 小規模な水辺でも餌動物が生息していれば採餌場として周辺地を利用する可能性がある。</p> <p>【移動分散の距離の目安】 小型鳥類は200~400m程度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 何よりも人がその姿に魅せられる数少ない生きものである。 水辺の水質や餌となる魚類の生息環境などの水環境条件を指標することからも優先的に検討すべき種と考える。 生息数は少ないが、河川の護岸や斜面地の穴や土の面を確保するなど配慮によって生息地を作り出すことは可能と考える。



カワセミ

③サギ類

サギ類の生息環境等	港区内での確認状況 区民のふれあい状況	関連する文献・論文による主な留意事項	計画立案への反映事項	設定理由等
<p>◆サギ類</p> <ul style="list-style-type: none"> サギ類には首や足が長いアオサギやシラサギ類（ダイサギ、チュウサギ、コサギ）と、それらが比較的短いゴイサギやササゴイ、アマサギなどがある。 ダイサギ、コサギ、アオサギなどはくちばしが長く魚類を採ることがうまく、チュウサギやアマサギなどはくちばしが短いため、昆虫類や両生類などをとるのに適していると言われている。 東京都 RDB：ダイサギ、コサギ 絶滅危惧Ⅱ類 	<ul style="list-style-type: none"> 第六台場のサギのコロニー（集団営巣地）では、ダイサギ、コサギ、アオサギなどがみられる。（HP 東京都環境局：東京都湾内水生生物調査による） 港区生物現況調査（第2次）では、第六台場でゴイサギ、ダイサギ、コサギ、アオサギのほか、アマサギが確認されている。 シラサギの仲間（ダイサギ、コサギ、アオサギ）は東京都生きもの調査対象種 	<ul style="list-style-type: none"> 「首都圏の都市環境インフラのランドデザインー首都圏に水と緑と生き物の環をー」（自然環境の総点検等に関する協議会（2004）） ランドデザインでは水と緑のネットワークを形成し「自然とのふれあいが乏しい地域」を解消していくことにより、市街化の進展した都心においても、人々の身近な生活の中でコゲラやコサギが舞うことのできる質が高く豊かな都市環境を創造することを目標の一つとしている。 「都市生態系ネットワーク評価システム」（清水建設：HP による）では、コサギ（水鳥）の生息適性ネットワーク評価図を示している。湾岸沿いや古川が生息適性地として評価されている。 「都市域に造られた大型ビオトープ「再生の杜ビオトープ」の果たす役割」（橋他（2007）：清水建設研究報告） 江東区越中島にある清水建設研究所内に整備されたビオトープ「再生の杜」（面積約 2,000 m²、水域面積 650 m²）では整備後約半年でアオサギ、ゴイサギ、コサギが観察された。大型水鳥は注目に値し、国内最大のサギであるアオサギがまず飛来し、次いでコサギ、ゴイサギが飛来した。アオサギは2006年10月下旬から約1週間飛来した。コサギは2006年12月中旬頃から飛来し始めた。ビオトープ池に導入した魚類はメダカ、ドジョウ、ヌマチチブ、モツゴ、タモロコ、カワムツおよびオイカワの7種類であり、この導入理由は、大型水鳥の飛来も期待している。導入した魚類の全個体数は約500匹であり、うちカワムツが最も個体数の多い種類であった。 「鳥類に配慮した河川整備の考え方」（渡辺裕二、島谷幸宏、渡辺昭彦（1994）：土木学会年次学術講演会） 小貝川において、鳥類の逃避距離調査を実施した結果、コサギの逃避距離の平均は98mであり、瀬や水際を利用するコサギ、イソシギなどに配慮するには人との距離を50～100m程度保つ必要があるとされている。 「ヒトとトリの距離ーヒトとトリの共存関係を求めてー」（浅野他（1996）：土木計画学研究・論文集） コサギ、カルガモなどの水鳥のグループは、都市への馴化という点で逃避行動距離が30～40%と短縮される。都市域は、生息できる環境は少ないが、この反対に天敵も少なく、狩猟圧もなく生存確率が高い環境といえ、都市では人間と鳥類の両方から歩み寄る環境が必要とされている。 	<p>【供給地や拠点での要件】</p> <p>供給地は第六台場がサギのコロニーになっている。</p> <p>拠点については、魚類、両生類、昆虫類などの餌のとれる浅場（運河沿い、古川、堀、公園の池など）</p> <p>【回廊の要件】</p> <ul style="list-style-type: none"> 飛び石として利用する水辺では餌動物が生息しているほか、人との距離や飛翔のために一定の空間が必要となる。水辺沿いの樹木・樹林も休息場などに利用される。 人との距離は50～100m程度が目安 <p>【点在する緑の要件】</p> <p>—</p> <p>【移動分散の距離の目安】</p> <p>コサギなど留鳥といわれているが、フィリピンなど遠方に移動する個体も標識調査で確認されていることから、広域レベルを移動できる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 繁殖地が港区内の第六台場にあり、周辺地域への供給地として重要な役割を果たしている。 この供給地から飛び石的な利用が期待される拠点が、お台場海浜公園、芝公園、運河沿いの干潟¹⁹⁾、古川などの沿岸域に位置している。 大型水鳥は区内の沿岸域や海域をネットワークする重要な目標種といえる。



コサギ



アオサギ



ゴイサギ

④トンボ類

トンボ類の生息環境等	港区内での確認状況 区民のふれあい状況	関連する文献・論文による主な留意事項	計画立案への反映事項	設定理由等
<p>◆トンボ類</p> <ul style="list-style-type: none"> 水辺地 生息環境は生活史のステージで異なり、幼虫期（ヤゴ）は水中、湿性環境で過ごし、羽化後は未成熟期と成熟期に分かれる。生殖腺の発達前の未成熟期では水辺を離れて樹林地などで摂食活動にいそしむ。成熟すると水辺に戻り繁殖活動に入る。 	<ul style="list-style-type: none"> アジアイトトンボ、アオモンイトトンボ、ギンヤンマ^{注1}、オニヤンマ^{注2}、シオカラトンボ^{注2}、オオシオカラトンボ、ナツアカネ^{注2}、アキアカネ^{注2}、コシアキトンボ、ウスバキトンボ、チョウトンボ など（港区生物現況調査（第2次）などによる） 注1：区民調査対象種 注2：東京都生きもの調査対象種 	<p>・「トンボの種類からみた水辺緑地計画の指標に関する予備的考察」（長田、森、田畑（1993）：造園雑誌 56(5)）</p> <p>トンボ科の広域分布種は環境の質に対応して種構成が変化するのではなく、種類数が増減する傾向にある。12箇所の水辺での調査結果から、以下のように類型化、優占種を選定できる。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 池の環境変化に消長が対応しない種（シオカラトンボ、コシアキトンボ、アキアカネ） ② 都市化の影響を受け単純化しつつある環境にも現れる種（ショウジョウトンボ、ナツアカネ、ノシメトンボ、ハラビロトンボ） ③ 環境変化の影響に敏感で衰退しつつある種（チョウトンボ、マイコアカネ、ヨツボシトンボ） ④ 多様な環境のみに生息する種（ベッコウトンボ） <p>・「トンボでつなぐ京浜の森-10年の記録」（トンボはどこまで飛ぶかフォーラム、2013）、横浜市京浜臨海部で2003年～2013年に実施された調査によると以下のことがわかった。確認数が多かったベスト3：シオカラトンボ、ウスバキトンボ、ショウジョウトンボ。チョウトンボの出現数が増えている。トンボの移動の最大は約7～8km。臨海部群集は内陸部に依存的ではなく独自性を持っている。</p>	<p>【供給地や拠点での要件】</p> <p>交尾、産卵、繁殖に必要な水辺を形成し、餌場や峙（ねぐら）、休息場となる樹林や草地をセットとして確保することで、各々の環境に適応する種が増加し種類数の増加が期待できる。</p> <p>【回廊の要件】</p> <p>樹林、草地、水辺がセットになっている。（臨海部の池などを飛び石的に利用して移動しているものが多い。）</p> <p>【点在する緑の要件】</p> <p>樹林、草地、水辺の要素を配置</p> <p>【移動分散の距離の目安】</p> <p>シオカラトンボなどで 700m～3km</p>	<ul style="list-style-type: none"> 区民にとって種別がわかりやすく、地域の環境の多様性を種数で表わすことができる。 また、樹林、草地、水辺のセットによる良好な環境づくりに反応して増える種もある。 捕獲調査など親しみながらモニタリングや生態観察に参加することができるメリットもある。



※P55 に、港区におけるトンボ類を対象としたエコロジカルネットワークの現況と課題を示しました。

⑤チョウ類

チョウ類の生息環境等	港区内での確認状況 区民のふれあい状況	関連する文献・論文による主な留意事項	計画立案への反映事項	設定理由等
<p>◆チョウ類</p> <ul style="list-style-type: none"> 花壇、植込みなどの植栽地 チョウにとって都心の公園緑地は供給地として機能し、点在する緑は回廊の役割を果たしている。 林縁部で多くみられ、種固有の食餌植物に依存し、スムーズな移動と分布の拡大には「緑の連続性」が重要。 	<ul style="list-style-type: none"> イチモンジセセリ、チャバネセセリ、アオスジアゲハ、カラスアゲハ、モンキアゲハ、クロアゲハ、ナミアゲハ^{注3}、キチョウ、モンシロチョウ、ルリシジミ、ベニシジミ、ヤマトシジミ など (港区生物現況調査(第2次)などによる) 注3：東京都生きもの調査対象種 	<ul style="list-style-type: none"> 「都市緑地を連結する緑道におけるチョウ類相の分布要因」(横田、小堀、北川(2008)：日本生態学会大会)、チョウ類成体を指標とする種組成と緑地を連結する緑道の環境条件は低木・草本層植被率や樹木群-草地隣接長などの要因による 「都市域のエコロジカルネットワークの形成」西尾、小田原、林(2002)：土木学会第57回年次学術講演会) 小規模な緑地であっても周辺に多くの種数を有する緑地が存在し、生態的コリドーなどを利用したネットワークが形成されれば、その緑地と同様の種数のチョウを呼び戻すことができる。屋上ビオトープで観察された成虫の6割が産卵している。 「都市の生態系ネットワークに関する実験的研究」(小田原、林、米村、西尾(2006)：清水建設研究報告) チョウは飛翔力を有しているものの、普段の生活圏が地上付近であり、ビル建物の屋上などの高所に向かう飛行には抵抗感を伴うものと推定される。しかし、ベランダ緑化のように緑を配置すれば3階ぐらいまで(高さ7m程度)は抵抗感がないものと推定される。 「生物多様性基礎調査報告書」(品川区 2012) 南大井4丁目浜川公園周辺の住商工混在地で9月ラインセンサス調査で、8種類のチョウを確認した(イチモンジセセリ、オオチャバネセセリ、ヤマトシジミ、ツマグロヒョウモン、アオスジアゲハ、クロアゲハ、ナミアゲハ、オオスカシバ) 	<ul style="list-style-type: none"> 【供給地や拠点での要件】 小規模でも地被、低木、中木層を中心に食餌植物を植栽することで種数を期待できる。 【回廊の要件】 点在する平面的緑や壁面やベランダの立体的な緑 【点在する緑の要件】 食餌植物の植栽 【移動分散の距離の目安】 アゲハチョウは最大で400m 	<ul style="list-style-type: none"> 幼虫の食餌植物の植栽によってどこでも小規模な緑で簡単に誘致しやすい。花などに吸蜜に飛来する成虫は都心部で人がふれあう生きものの代表的なものといえる。 緑の連続性などのエコロジカルネットワークの状態を指標する生きものとしても有効。 園児や児童への環境教育として幼虫も重要。



※P56に、港区におけるチョウ類を対象としたエコロジカルネットワークの現況と課題を示しました。

⑥バッタ類

バッタ類の生息環境等	港区内での確認状況 区民のふれあい状況	関連する文献・論文による主な留意事項	計画立案への反映事項	設定理由等
<p>◆バッタ類 (直翅目：キリギリス、コオロギ類を含む)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 草地 • 環境の変化に敏感かつ小規模なビオトープでの定着が可能 • 都市部の人工的に創出された緑地空間に生息が期待でき、広域の環境の指標となる。 	<ul style="list-style-type: none"> • ハラヒロカマキリ^{注4}、オオカマキリ^{注4}、ツコムシ、エンマコオロギ、ツツレサセコオロギ、アオマツムシ^{注4}、カナタタキ、オンブバッタ、ショウリョウバッタ、クルマバッタモドキなど (港区生物現況調査(第2次)などによる) • 注4：区民調査対象種 	<ul style="list-style-type: none"> • 「大規模市街地内から郊外地にかけてのバッタ類生息密度の変化について」養父、山田、中島、中尾、松本(2001)：ランドスケープ研究 64(5) オンブバッタに関しては、開発が高度に進んだ高密な市街地内において繁殖が可能であること、ショウリョウバッタ、イボバッタに関しても、ある程度までの開発密度の市街地において繁殖可能であること 緑地の規模とバッタ類の有無、生息数とは全く関連性が認められず、大規模な緑地が必ずしもバッタ類の生息に寄与するわけではない。 • 「横浜市金沢区の港湾部埋立地における直翅目の分布状況とそれに影響を及ぼす環境要因」(板川、片桐、一ノ瀬、大澤、石川(2010)：ランドスケープ研究 73(5)) バッタ類の分布に管理強度の指標として最高時の草丈、中高木層の常緑樹¹⁰⁾及び落葉樹²¹⁾の被度、埋め立て以前の緑地からの距離が関係している。 施工竣工後26年が経過している金沢緑地の樹林では、コオロギ類の出現を確認でき、わずかに形成された下層植生にコバネイナゴ、オンブバッタが記録されたことから、将来的に下層植生が形成された場合は新たな種の定着が期待できる。 • 「東京湾沿岸部埋立地における緑被分布とバッタ類の生息分布との関係について」(板川、片桐、一ノ瀬、大澤、石川(2012)) 草地環境の規模のみならず、種の供給源となっている周囲の草地や農地のパッチのサイズやその近接距離がバッタの分布に影響している。 最も出現種類が多い地点で確認される種はイボバッタ、ウスイロササキリ、ホシササキリ、セスジツコムシのグループであり、これらの種に注目することで良好な条件の草地環境を抽出できる可能性がある。 	<p>【供給地や拠点での要件】 草地の維持管理や緑地の階層性を確保することでバッタ類の生息に配慮する。小規模でも草地と樹林地とを組み合わせることでバッタ類の生息が期待できる。</p> <p>【回廊の要件】 陸地～埋立地の移動は埋立以前の距離に応じて期待できる。</p> <p>【点在する緑の要件】 小規模な草地でも定着が期待できる。</p> <p>【移動分散の距離の目安】 飛翔能力が高いバッタ(カワラバッタの例)で平均428m、最大で1,831m、飛翔能力が弱いバッタ(クツムシの例)で平均約100m</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 減少が著しい草地環境が回復する指標となる。また草刈など人為的な手入れによる変化に敏感に反応するバッタ類に注目することで、人による植物への手入れと生きものとの関係を理解する指標となる。



ショウリョウバッタ



オンブバッタ



クルマバッタモドキ



ハラヒロカマキリ



オオカマキリ



アオマツムシ



ツコムシ



エンマコオロギ

⑦アズマヒキガエル

アズマヒキガエルの生息環境等	港区内での確認状況 区民のふれあい状況	関連する文献・論文による主な留意事項	計画立案への反映事項	設定理由等
<p>◆アズマヒキガエル</p> <ul style="list-style-type: none"> 豊かな林床や落葉が溜まっている樹林地と水辺地が一体になっているところ 餌となる昆虫などが豊富な場所（生態系上位性種） 東京都 RDB：準絶滅危惧 	<ul style="list-style-type: none"> 区内で確認される主なカエル類はアズマヒキガエルとウシガエル池を伴う樹林地内で確認されている。 <p>（港区生物現況調査(第2次)などによる)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「皇居の周りで希少カエルが大繁殖 群れをなすオタマジャクシ」(日本経済新聞 2012.5) 東京千代田区北の丸公園の池、千鳥ヶ淵公園の噴水池で3月下旬～4月上旬に大量に孵化した。 赤坂小学校で4年前から整備していたピオトープ池の土や泥を移動する作業中に、アズマヒキガエルを確認。学校内で大騒ぎ。(NEC キャピタルソリューション株式会社 HP、2008) 「生物多様性に配慮したピオトープ」(寺井、岩井、飛世：大林組技術研究所報、2010) 水面面積 160 m²の開放的な明るい池では、シオカラトンボやアキアカネなどのトンボ類、アメンボ類、繁殖期のカルガモ、産卵期のアズマヒキガエルも誘致対象種である。 	<p>【供給地や拠点での要件】 樹林地と水辺がセットになっている場所。水辺は小さい規模でも可。</p> <p>【回廊の要件】 道路なども移動するがロードキルのおそれがある。</p> <p>【点在する緑の要件】 事務所や民家の庭にも生息</p> <p>【移動分散の距離の目安】 アズマヒキガエルは平均 174mで最大で 504m¹⁾</p> <p>¹⁾：「ヒキガエルの生態学的研究」(矢野亮(1978)：(Ⅲ)ヒキガエルの行動、自然教育園報告、8：107-120)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 港区などの都心区でも餌昆虫が豊かな樹林地で生息する大型の生きものである。拠点や供給地のものの質を指標するものとして重要である。 供給地から周辺に分布を広げるためには、段差の解消や緑地の連続性確保が必要となる。



アズマヒキガエル

(3) 隣接区のエコロジカルネットワーク図

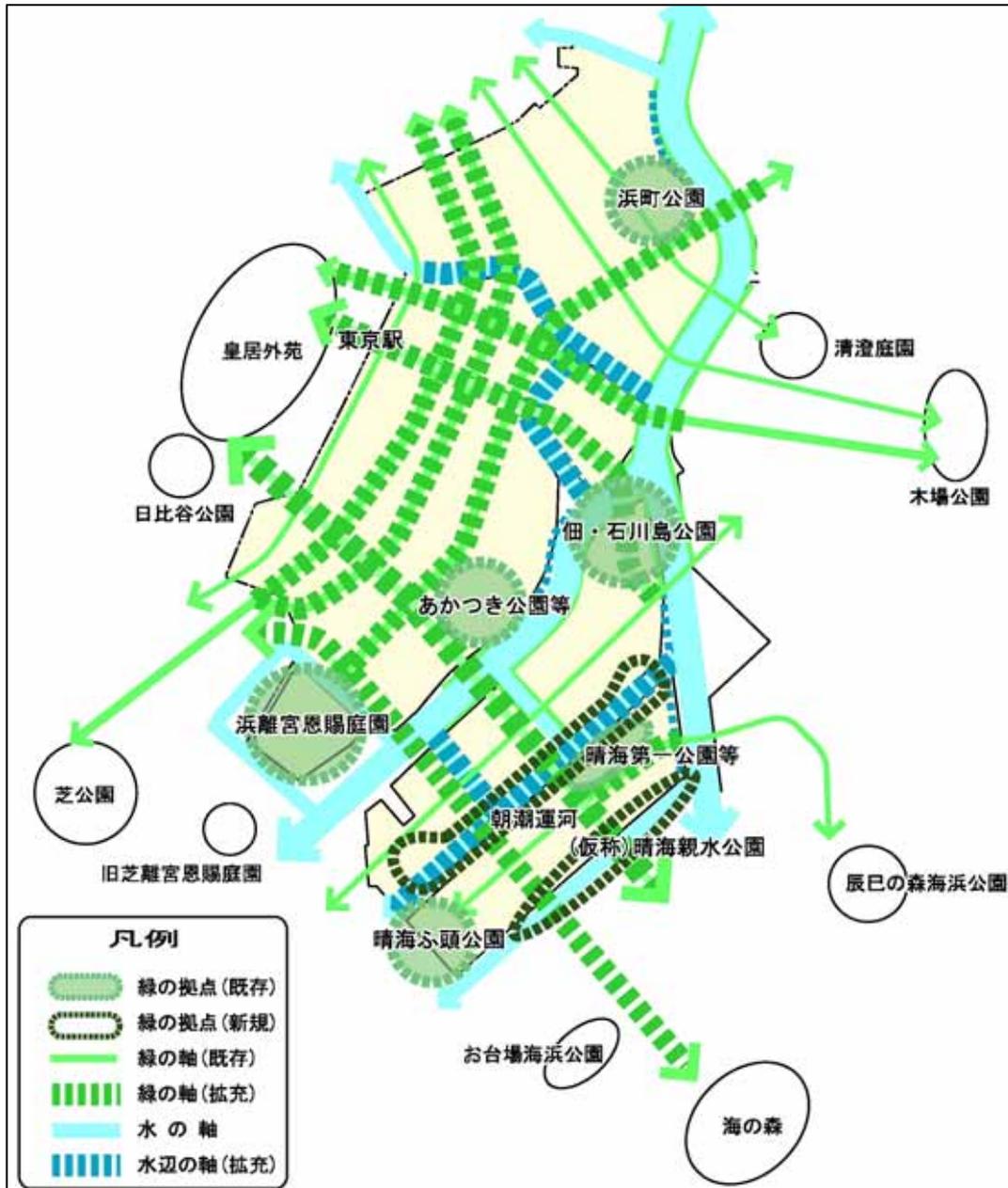
① 千代田区・生きものネットワークの広がり (将来イメージ)



生きものネットワークの広がり (将来イメージ)

※「ちよだ生物多様性推進プラン」(平成 25 年 3 月、千代田区) を基に作成

② 中央区・緑の将来像図



※「中央区緑の基本計画」(平成21年3月)より引用

③ 新宿区・みどりの配置方針図



※「みどりの基本計画（改定）素案」（平成20年、新宿区）より引用

④ 江東区・環境保全システムの配置方針図



※「みどりと自然の基本計画」(平成 19 年 7 月) より引用

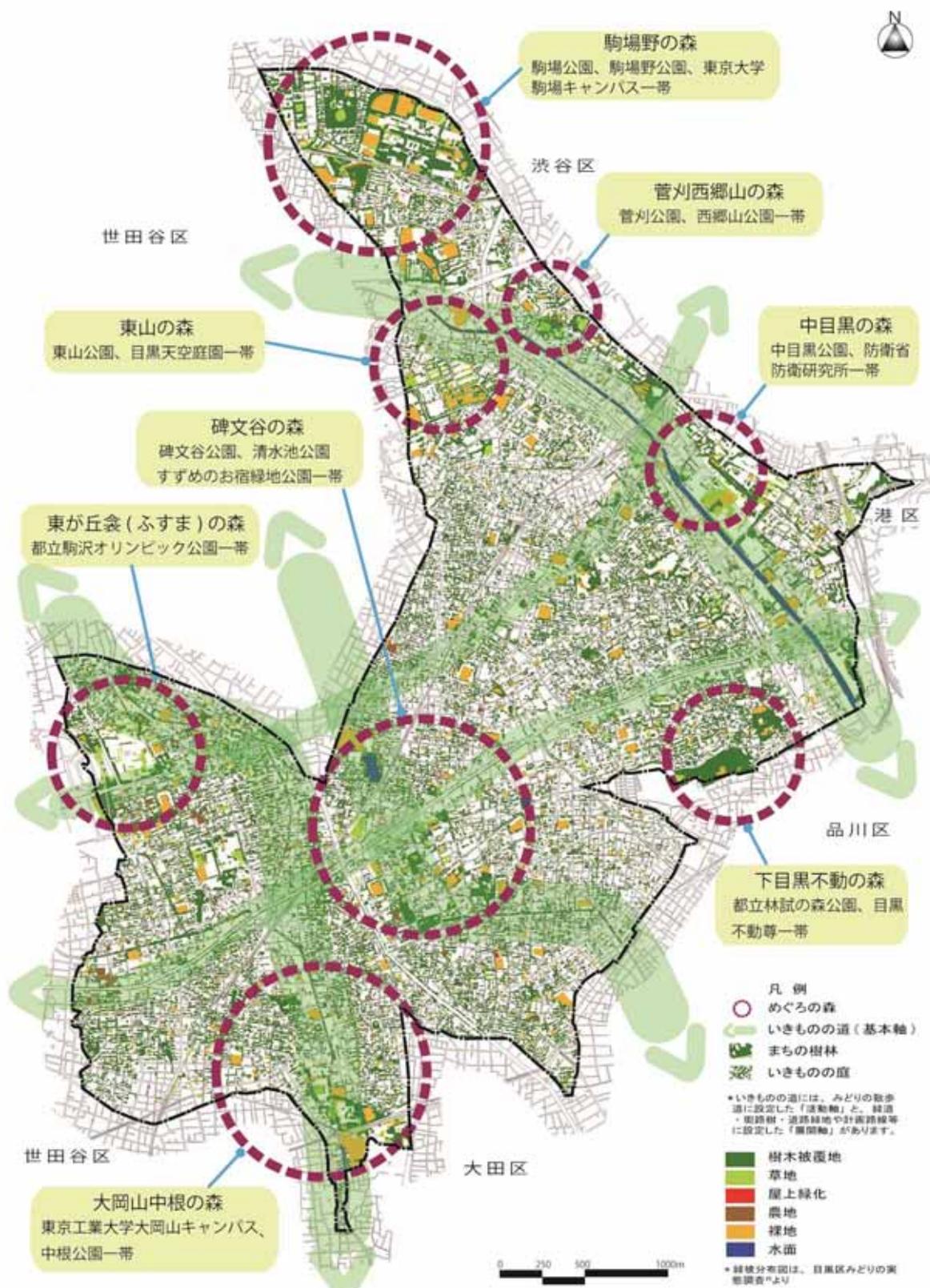
⑤ 品川区・水とみどりの将来構造



※「水とみどりの基本計画」（平成 24 年 6 月、品川区）より引用

将来構造の方向	将来構造の方向方針
	崖線軸 緑地に残されたみどりの保全や、緑地の増進により、南東方面のみどりを長づけていきます。
<水とみどりの軸> 広域的な環境を支える水とみどりのネットワークを構築します。	臨海軸 目黒川と東品川、天王洲アイランドなど、臨海部から楽しめる景観形成や、水辺にぎわいの創出を図り、観光・交流、レクリエーション、娯楽等の機能の充実を目指します。
<水とみどりのみち> 区内の水とみどりのネットワークの充実を図ります。	水のみち 緑地の緑化や水辺の親歩道の充実を図ることにより、水辺のネットワークを構築します。
<みどりの輪道> まとまりのあるみどりの機能の発揮を図ります。	みどりのみち みどりの輪道や水辺の緑地帯のみどりの緑地帯を、みどりのみちとして位置づけ、環境保全・娯楽・観光・レクリエーション等の機能の充実を図ることにより、水とみどりのネットワークの充実を図ります。
<水辺のふれあいスポット> 身近な水辺の魅力向上を図ります。	民間企業と連携し、水辺のふれあいスポットと位置づけ、水とみどりの魅力を高めることにより、水とみどりの魅力向上を図ります。
<緑化重点地区> 区全体の緑化を推進します。	区全域を緑化重点地区に位置づけ、みどりの不足地域を中心として、民間企業・民間団体と連携し、緑化推進に取り組めます。
<みどりの保全エリア> 貴重なみどりを保全・育成します。	朝霧山、高瀬山、赤田山などで残された大規模な緑地を保全・育成するみどりの保全エリアとして指定し、民間企業・民間団体と連携し、みどりの保全・育成を図ります。

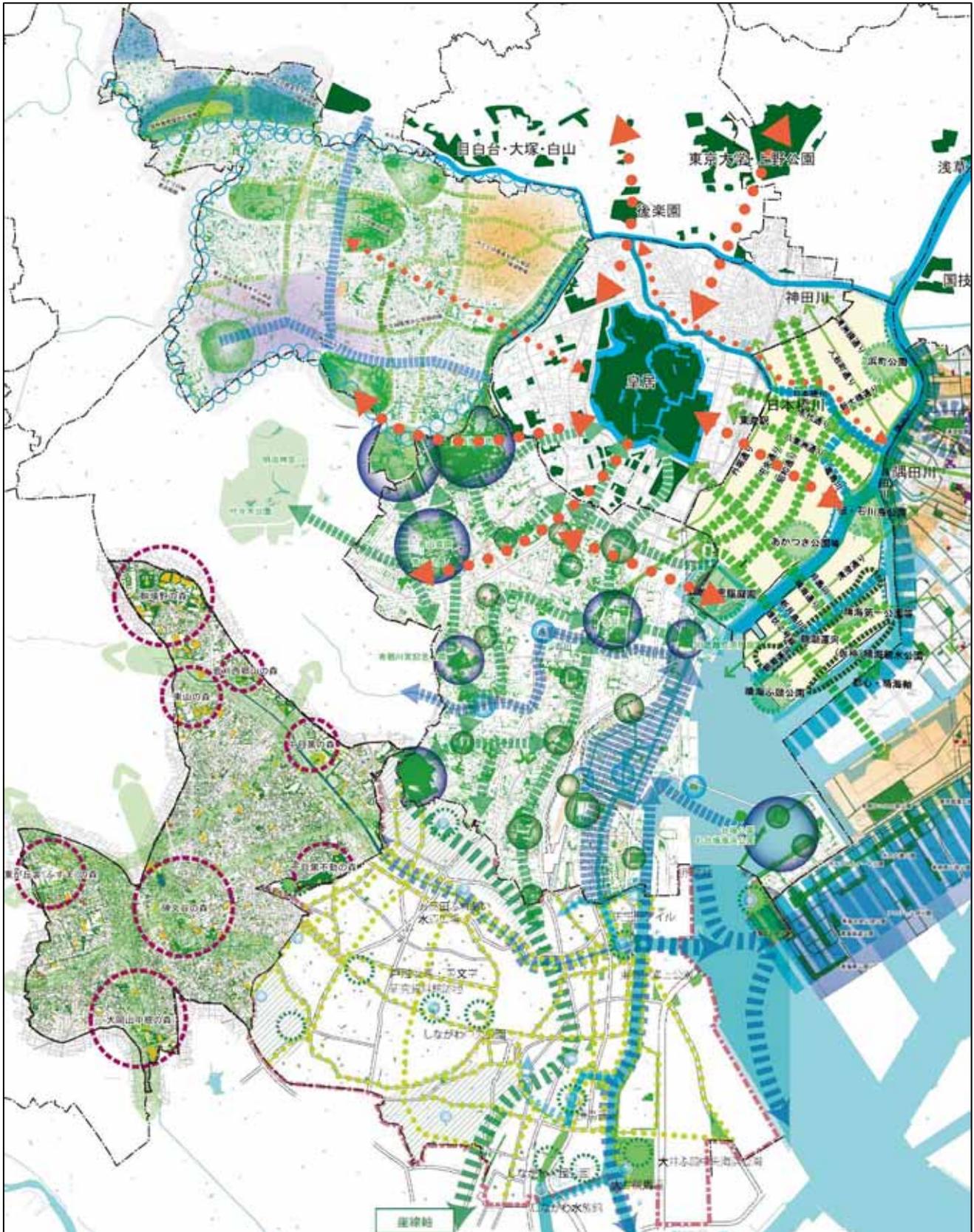
⑥ 目黒区・エコロジカルネットワーク形成図



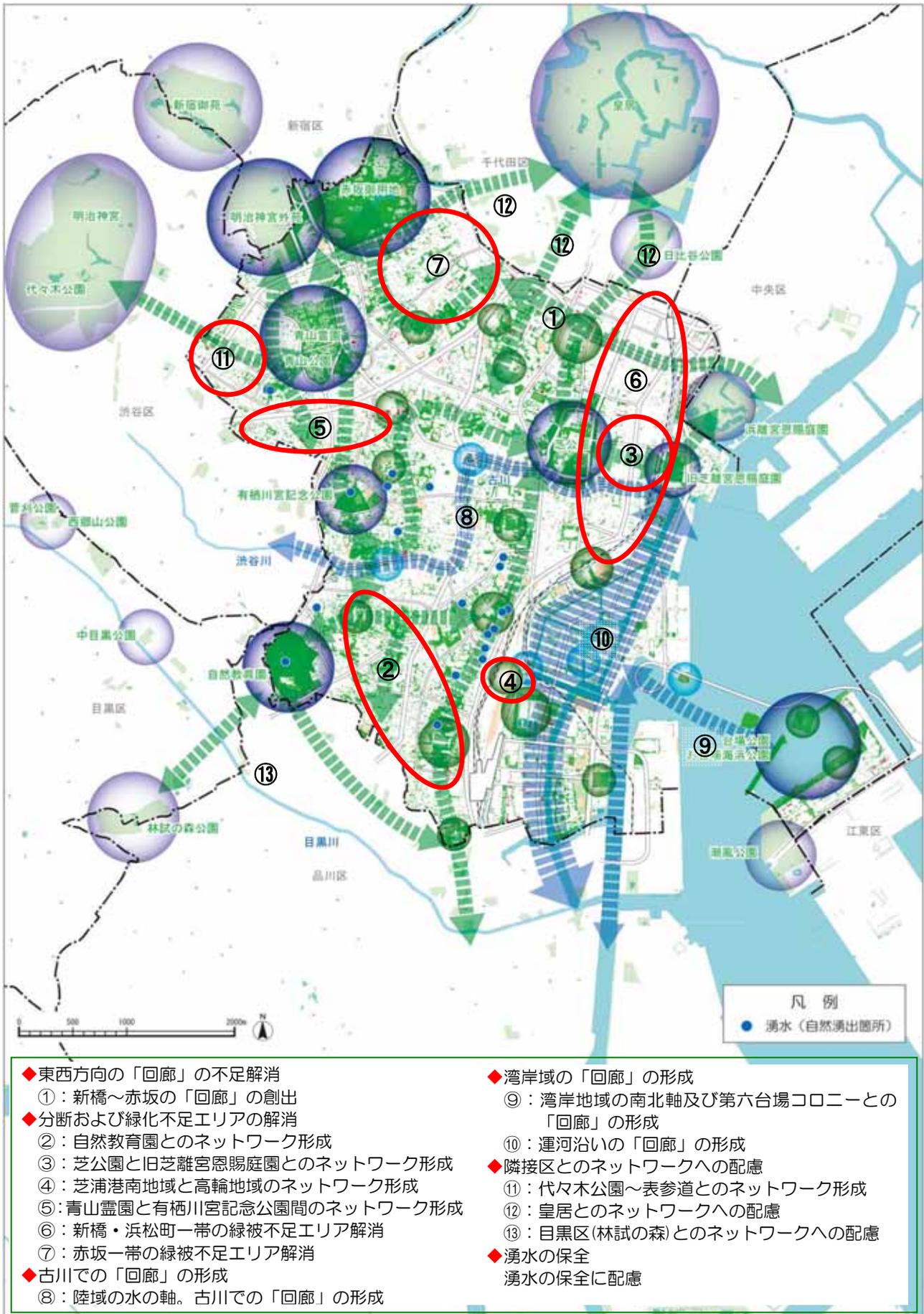
※「目黒区生物多様性地域戦略 ささえあう生命の輪 野鳥のすめるまちづくり計画」(平成26年3月、目黒区)より引用

⑦ 隣接区とのエコロジカルネットワーク重ね図

港区エコロジカルネットワークの検討にあたって、港区エコロジカルネットワーク（2050年目標）および隣接区（江東区、中央区、千代田区、新宿区、目黒区、品川区）のエコロジカルネットワーク図（千代田区、目黒区）、水と緑のネットワーク図（中央区）、環境保全系統の配置方針図（江東区）、水の緑の配置方針図（新宿区、品川区）の重ね図を作成した。



(4) エコロジカルネットワーク形成 (2050年) に向けての方針と課題の整理



◆東西方向の「回廊」の不足解消

港区内では、供給地の立地および地形の関係から斜面林等の連なりによる南北方向への「回廊」は現況でも見ることができます。これに対して東西方向の「回廊」が不足しているといえます。とりわけ、区北部の新橋から赤坂、区中央部の芝から青山にかけての東西軸の「回廊」創出が課題となっています。

① 新橋～赤坂の「回廊」の創出

環状第2号線周辺地区のまちづくりと併せて生物多様性のある緑化を推進し、新橋から赤坂への「回廊」の創出を目指します。

◆分断および緑化不足エリアの解消

港区内には、緑被10%以下のエリアが新橋・浜松町・芝や白金、南青山、赤坂1～2丁目、品川駅近辺JR線用地等で面的に広がっています。これらのエリアは生物多様性の観点から生きものの生息環境が少なく、また、生きものの移動における分断要素の高いエリアとなっており、エコロジカルネットワークを機能させる上からも個人の庭や建物、屋上緑化、壁面緑化などの「点在する緑」を増やす取組みが望まれます。

② 自然教育園とのネットワーク形成

港区南部の生物多様性の「供給地」となっている自然教育園ですが、北部と比べて周辺に「供給地」となる大規模緑地がないことから、現況では孤立気味であると言えます。このため周辺地域での「拠点」や「点在する緑」を創出し自然教育園とのネットワークの形成を目指します。

③ 芝公園と旧芝離宮恩賜庭園とのネットワーク形成

芝地域中央部の「供給地」となっている芝公園と旧芝離宮恩賜庭園ですが、JR浜松町駅付近でのネットワークが切れています。この間について街路樹や屋上緑化、壁面緑化など「点在する緑」を創出し両「供給地」間のネットワークの形成を目指します。

④ 芝浦港南地域と高輪地域とのネットワーク形成

芝浦港南地域と高輪地域については、間にJR線が縦断しており、分断要素となっています。とりわけ高輪地域側は斜面緑地の連なる港区内でも生物多様性の高いエリアとなっています。JR田町駅とJR品川駅間で計画されている再開発に併せてこのエリアでの生物多様性緑化を取込むことによりネットワークの形成を目指します。

⑤ 青山霊園と有栖川宮記念公園間のネットワーク形成

港区北部の生物多様性の「供給地」となっている青山霊園と中部の「供給地」となっている有栖川宮記念公園間の地域は、緑被も少なく、それぞれが分断された状態となっていると言える。このため、建物緑地、屋上緑化などの「点在する緑」を増やす取組みが望まれます。

⑥ 新橋・浜松町一帯の緑被不足エリア解消

新橋から浜松町にかけてのJR線に沿った一帯は、港区の中でも緑被の低いエリアが面的に広がっているエリアです。民間の建物や屋上緑化、壁面緑化などの推進により「点在する緑」を増やす取組みが望まれます。

⑦ 赤坂一帯の緑被不足エリア解消

赤坂一帯は緑被の低いエリアが面的に広がっており、皇居（千代田区）とのネットワーク

上の分断要素となっています。民間の建物や屋上緑化、壁面緑化などの推進により「点在する緑」を増やす取組みが望まれます。

◆古川での「回廊」の形成

⑧ 陸域の水の軸。古川での「回廊」の形成

東京都と連携して、生きものの生息に配慮した護岸沿いの緑化等を進め、生物多様性の向上に努めます。

◆湾岸域の「回廊」の形成

⑨ 湾岸地域の南北軸及び第六台場コロニーとの「回廊」の形成

芝浦港南地域は湾岸域に立地し、内陸部と比較するとその生態系は異なるものとなっています。

そのため、芝浦港南地域においては、運河を軸とした東京港湾岸の南北軸の「回廊」の形成を目指します。

また、第六台場には東京港でも有数の水鳥のコロニーが存在しており、芝浦港南地区とのつながりが想定されます。

⑩ 運河沿いの「回廊」の形成

芝浦港南地域一帯の運河は、港区内で海の環境を有した貴重なエリアですが、運河沿いの護岸は直立護岸が多く多様性の質は高いとはいえませんが、一部で「カニ護岸」の整備など自然環境に配慮した整備も進められています。

◆隣接区とのネットワークへの配慮

⑪ 代々木公園～表参道とのネットワーク形成

都内でも有数の生物多様性の拠点、代々木公園、明治神宮から表参道の回廊を経て港区に引き込む南青山付近は緑被が低いエリアとなっています。このエリアでの屋上緑化や壁面緑化など「点在する緑」を創出することによりネットワークの形成を目指します。

⑫ 皇居とのネットワークへの配慮

港区北側は千代田区、中央区と隣接しており、千代田区には皇居といった都心部でも有数の供給地が立地しており、港区内においてはこれらと隣接する赤坂、芝地区において、「拠点」「点在する緑」の生物多様性緑化によりネットワークへ配慮したものとします。

⑬ 林試の森（目黒区・品川区）とのネットワークへの配慮

林試の森とのネットワークに配慮したものとします。

◆湧水の保全

雨水の浸透を推進することは洪水防止などの防災機能を高め、生きものの生息場所となる湧水の保全にもつながります。

(5) 公共施設・民間施設の生物多様性緑化参考事例

①公共施設における生物多様性緑化の参考事例



都道における伸び伸びとした道路緑化の例(愛宕2丁目)
ビル群に負けない緑の景観形成は、生物多様性の第一歩です。



施設内の樹林地を維持・保全している例(白金台4丁目)
公共施設内の樹林や大径木は貴重な供給地となります。



多くの野鳥が集まる公園内の植生管理の例(海岸1丁目)
明るく開けた公園の隅に隠れ場やねぐらとなる場所を設けています。



在来種を主体とした生物多様性緑化の例(浜松町1丁目)
エコプラザの在来種を主体とした植栽です。



接地性の高い上部利用の緑化空間の例(港南1丁目)
植物の管理や四季を通じたふれあいで生物多様性を享受することができます。



学校園庭における生物多様性へ配慮(台場1丁目)
親も参考になるように開放することで地域への波及を期待することができます。



歴史文化的な公園が供給地になっている例(南麻布4丁目)
敷地規模の大きな公園緑地は、生物多様性を有しています。



歩道と沿道の緑が一体化され効果的な例(愛宕1丁目)
沿道の神社や公開空地の緑を生かしています。



樹林の階層構造がよくわかる例(北青山1丁目)
神宮外苑は厚みがありませんが森と呼べる構造を呈しています。



自然な草はらを創出している例(港南1丁目)
草はらは、港区内では少ない環境です。ちょっとしたスペースを草はらにすると生物多様性に有効です。



自然教育園に隣接してピオトープを整備している例
(白金台6丁目)
区立公園では生きものを誘致する工夫がみられます。

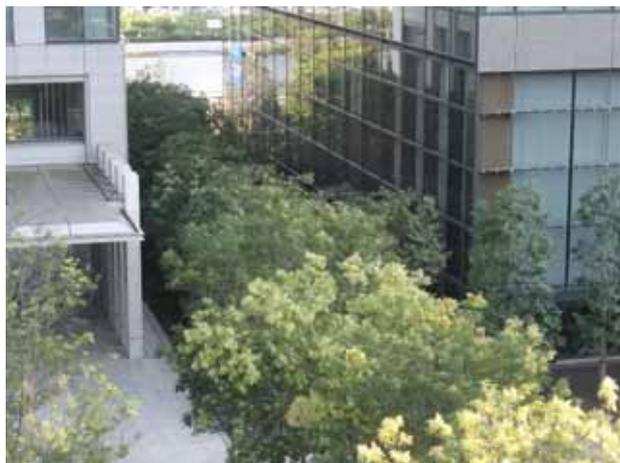


アドプト・プログラム締結によるまちかどの花壇(高輪桂坂)
四季折々に咲く花と花にやってくるチョウを楽しめる場所づくりを行っています。

②民間施設における生物多様性緑化の参考事例



多様な生きものへ配慮が認定された例（赤坂1丁目）
区内では都市緑化機構からの認定が5件あります。



公開空気を「回廊」としている例（東新橋1丁目）
臨海部では潮風や強風に対応した樹種選定がされています。



市街地再開発事業で庭園が再生された例（六本木6丁目）
カルガモや水辺のトンボなど生きものに配慮した管理が行われています。



地下鉄駅前の公開空地のみどりの例（虎ノ門4丁目）
ビルが林立している街の玄関口にある緑は多様性の価値が高くなっています。



規模が小さいが壁面緑化など特徴のある例（港南2丁目）
駅前の商業業務地で徹底した緑化を実施しています。



JHEP²⁶⁾ 生物多様性の最高ランクを取得した例（虎ノ門1丁目）
在来種や潜在自然植生に配慮した緑化が行われています。



生物多様性に配慮した緑化（六本木1丁目）
小鳥や昆虫のすみかを考えてあえて枯れ枝などを設置しています。（仙石山森タワー：コゲラの庭）



生物多様性に配慮した緑化（虎ノ門1丁目）
緑化だけでなく水辺を取り入れた整備を行い、多様性を高めています。（虎ノ門ヒルズ）



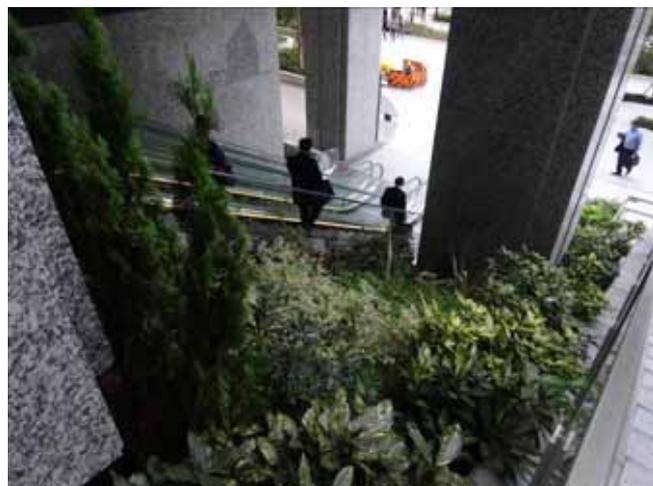
生物多様性に配慮した屋上緑化（六本木6丁目）
多種多様な植栽による緑化を屋上に整備しています。（六本木ヒルズ）



生物多様性に配慮した屋上緑化（渋谷区神宮前4丁目）
東急プラザ表参道原宿の屋上緑化は表参道の歩道から見えるように整備されています。



生物多様性に配慮した屋上緑化（渋谷区神宮前4丁目）
8種の樹木による「おもはらの森」を整備しています。（東急プラザ表参道原宿）



スロープを利用した緑化の例（港南1丁目）
エスカレーターと階段の間のスロープを緑化しています。（品川シーズンテラス）



拠点の緑と点在する緑がネットワークされている例（赤坂6丁目）
氷川神社の樹林は周辺への供給地として機能しています。



古い町並みや路地が残る住宅地の例（白金6丁目）
点在する緑や鉢植えなどの緑が生物多様性に寄与しています。



商業店舗で落ち着いた緑が連続している例（南青山5丁目）
景観に寄与し生物多様性保全も機能しています。



幹線道路から住宅地への緑が残っている例（白金6丁目）
幹線道路から住宅地への道に沿って緑を残すことにより地域の生物多様性を高めています。



建物周囲や屋上を緑化したマンションの例（南麻布3丁目）
低層マンションでは屋上緑化の効果は高いものとなっています。



坂と社寺の多い住宅地で緑が残っている例（三田4丁目）
木造戸建て住宅の多い地域では個人の庭の緑が多く残され、生物多様性を高めています。

(6) 生きものごよみの例

- ・身近な水辺等の環境や地域との係わりによる「生きものごよみ」作成の例

生きもので感じる季節 —港区でみられる生きものごよみ—

春	3月 ウメ開花 タンポポ開花 ウグイス初鳴 ヒバリ初鳴 自然教育園の池でアズマヒキガエル産卵  ウグイス	4月 ツバメ飛来・モンシロチョウ、ウスバシロチョウ飛ぶ  ホトケノザ、スミレ、ナズナなど 道端の草花開花 ヨモギ、ツクシが芽吹く モンシロチョウ	5月 トカゲ、カナヘビが活動しはじめる  トカゲ
	6月  ニイニゼミ初鳴き ニイニゼミ	7月 古川や水辺でトンボ類がみられる  サルスベリ咲き始める サルスベリ	8月 ススキ開花 夏木立にセミの大合唱  ススキ
	9月 アキアカネなどのアカトンボが飛ぶ オオカマキリが産卵しはじめる  モズ高鳴 ヒガンバナ開花	10月 エンマコオロギ、キリギリスなど、鳴く虫の声を楽しむ  シラカシ コナラ、シラカシのどんぐりの季節	11月 有栖川宮記念公園の木々が美しく色づく 
冬	12月 シジュウカラ群れる ジョウビタキ、メジロが公園や庭先へ飛来  古川や海辺でカモ類がみられる スズガモ	1月  マンリョウの赤い実が冬枯れに美しく映える	2月 冬木立の枝が描くふしぎなすてきな模様 

港区の主な生きものたち								
■鳥類	■両生類	■は虫類	■哺乳類	■魚類	■昆虫類	■植物	<園芸種>	
カワウ アオサギ カルガモ スズガモ トビ ハヤブサ ユリカモメ コアジサシ	カワセミ アズマヒキガエル ウシガエル	ウサガメ アカミミガメ ヤモリ トカゲ カナヘビ アオダイショウ など	アズマモグラ アブラコウモリ など	ウナギ コイ メダカ ドジョウ ヨシノボリ類 など	<トンボ類> シオカラトンボ オニヤンマ アキアカネ ヨシノボリ類 コシアキトンボ	<バッタ類> クビキリギリス ショウリョウバッタ <チョウ類> モンシロチョウ ナミアゲハ など	キショウブ ヨシ オニグルミ アカガシ シラカシ ノアザミ コナラ アカマツ ハマヒルガオなど	ソメイヨシノ サザンカ ヒマラヤスギ ナンテン イチョウ クスノキ ユリノキ ウメ など

「港区生物現況調査(2次)」の結果および「港区のみどりと生きもの2010」(平成22年、港区)を参考に作成

(7) 港区で確認されている外来種（植物）

【区分について】

区分① 「特定外来生物等一覧」（2015、環境省）における掲載種のうち、港区生物現況調査（第2次）において、港区内で確認されている種を掲載した。

区分② 「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（2015、環境省、農林水産省）における掲載種のうち、港区生物現況調査（第2次）において、港区内で確認されている種を掲載した。

・和名の配列は原則として「植物目録」（昭和62年、環境庁自然保護局）に準拠した。

和名	区 分		主な確認環境	形態	備考
	①	②			
ヒメスイバ		○	芝地、路傍など	多年草 ¹⁴⁾	
ナガバギシギシ		○	路傍、畑地、市街地など	多年草	
エゾノギシギシ		○	芝地、路傍、畑地、川岸など	多年草	
ムシトリナデシコ		○	河川敷、市街地、道端など	一年草	
ホコガタアカザ		○	海岸埋立地、海岸の裸地など	一年草	
ヒイラギナンテン		○	都市近郊の二次林など	常緑広葉樹	
セイヨウカラシナ		○	河川敷、畑地、路傍など	二年草 ¹⁷⁾	
オランダガラシ		○	河川、溝、水路など	多年草	
ビワ		○	暖地の石灰岩地	常緑広葉樹	
アレチヌスビトハギ		○	道端、市街地、空き地など	落葉広葉樹	
ハリエンジュ(写真1)		○	荒地、土手、野原など	落葉広葉樹	別名：ニセアカシア
ナンキンハゼ		○	植林地、草原、撈乱地、湿地など	常緑広葉樹	
シンジュ(写真2)		○	路面間隙、河川敷、土手など	落葉広葉樹	別名：ニワウルシ
フヨウ		○	庭木、公園樹、鉢植えなどに利用	落葉広葉樹	屋久島などではサキシマフヨウとの交雑が懸念される。都市域では園芸種
アレチウリ(写真3)	○	○	林縁、道端、河川敷、畑など	つる性一年草	
コマツヨイグサ		○	道端、市街地、畑地、海岸など	越年草 ³⁾ または多年草	
トウネズミモチ		○	農耕地、沿岸地域など	常緑広葉樹	
ツルニチニチソウ		○	人家付近、スギ林の林床など	多年草	
アメリカネナシカズラ		○	畑地、路傍、河川敷など	一年草	

和名	区 分		主な確認環境	形態	備考
	①	②			
フサフジウツギ		○	市街地、水路、湿地など	落葉広葉樹	
オオカワチシャ(写真4)	○	○	湿地、河川、水路など	多年草	
オオバコ		○	日当たりの良い道端など	多年草	高山ではハクサンオオバコとの交雑が懸念される。都市域では在来路傍雑草
オオブタクサ		○	畑地、空き地、鉄道線路沿いなど	一年草	
アメリカセンダングサ		○	水路、路傍、湿った草地など	一年草	
アメリカオニアザミ		○	河川敷など	一～二年草	
ハルシャギク		○	路傍、空き地など	一年草	
マルバフジバカマ		○	市街地、路傍など	多年草	
セイトカアワダチソウ(写真5)		○	路傍、草地、河川敷など	多年草	
オオアワダチソウ		○	道端、河川敷など	多年草	
ヒメジョオン(写真6)		○	畑地、路傍など	一～二年草	
セイヨウタンポポ		○	市街地、道端、空き地など	多年草	リストにおける種名表記：外来性タンポポ種群
オオオナモミ		○	畑地、路傍など	一年草	
アツバキミガヨラン		○	海岸の砂地など	多年草	
ホテイアオイ		○	湖沼、河川、水路など	多年草	
キシウブ		○	湖沼、河川、水路など	多年草	
トキワツユクサ		○	石垣、路傍、林床など	多年草	別名：ノハカタカラクサ
メリケンカルカヤ		○	畑地、路傍など	多年草	
ハルガヤ		○	路傍、草地、河原など	多年草	
カモガヤ		○	畑地、路傍、草地、河川敷など	多年草	
シナダレスズメガヤ		○	路傍、河原など	多年草	

和名	区 分		主な確認環境	形態	備考
	①	②			
オニウシノケグサ		○	市街地、運動場、 庭、路傍、河原な ど	多年草	
ネズミムギ		○	畑地、路傍、空き 地など	越年草	リストにおける種名表記 ：ドクムギ属
ホソムギ		○	畑地、路傍、空き 地など	多年草	リストにおける種名表記 ：ドクムギ属
オオクサキビ		○	畑地、路傍、河川 敷、湿地など	一年草	
シマスズメノヒエ		○	畑地、芝地、路傍、 溝など	多年草	
アメリカスズメノヒエ		○	畑地、路傍など	多年草	
オオアワガエリ		○	畑地、路傍など	多年草	
セイバンモロコシ		○	畑地、路傍、堤防 周辺など	多年草	
ナギナタガヤ		○	畑地、路傍など	一～二年草	



写真1◆ハリエンジュ (ニセアカシア)



写真2◆シンジュ(ニワウルシ)



写真3◆アレチウリ



写真4◆オオカワヂシャ



写真5◆セイトカアワダチソウ



写真6◆ヒメジョオン

(8) 支援制度

① 技術的指導

- 緑化指導時または維持管理段階における相談窓口 (区環境課緑化推進担当)
- エコプラザにおける生物多様性に関連した講座やワークショップの開催 (区環境課)
- エコプラザにおける「自然共生型社会」関連の情報提供 (区環境課)
- 港区内での自然観察会の開催 (区)
- 港区生物現況調査(第2次)報告書の公開 (区環境課緑化推進担当)
- 「港区のみどりと生きもの2010」の販売 (区政資料室及び麻布・赤坂・高輪・芝浦港南地区総合支所管理課)
- 自然教育園、新宿御苑、明治神宮などのエコロジカルネットワークの核となる施設の環境教育プログラムの利用 (国、東京都など関係機関)

② 認定及び表彰制度

- 港区みどりの街づくり賞 (区環境課緑化推進担当)
- SEGES 都市のオアシス認定 (公益財団法人 都市緑化機構)
- ハビタット評価認証制度 (公益財団法人 日本生態系協会)
- いきもの共生事業所®認証：ABINC(エイビंक)認証
(一般社団法人いきもの共生事業推進協議会)
- 東京都みどりの大賞 (東京都環境局)

(9) 用語集

【あ】

1) エコロジカルネットワーク

個々の生物の生息地が、生物の移動が可能であるようにつながれた状態にあること。野生生物の生息・生育空間の確保、人と自然のふれあいの場の提供などの機能が発揮されることが期待されます。

2) エコスタック

生きものを意図的に増やすことを目的として設置する仕掛け（装置）のうち、木の枝や石などを積み重ねたものをいう。

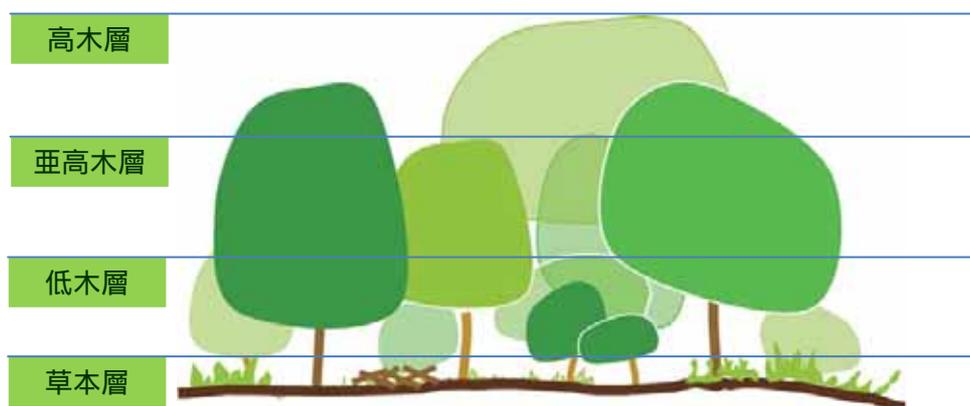
3) 越年草

秋に発芽して越冬し、翌年に枯れる草のこと。

【か】

4) 階層構造（樹林の階層構造）

高さの異なる樹冠の層（高木層、亜高木層、低木層、草本層など）からなる樹林の構造。主に生活型や成長段階が異なることにより、階層構造が形成されます。



階層構造のイメージ

5) 外来種

国内由来か国外由来かを問わず、人為によって意図的・非意図的に本来の生息地・生育地の外から持ち込まれた生物。

6) 外来生物法

特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（平成 16 年法律第 78 号）

7) 感潮域

川の中で、潮の満ち引きの影響を受ける区域。海が満潮の時には、水位が上がったり、水が逆流したりします。

【さ】

8) 在来種

その地域の環境や地形に対応した、もともと生育している植物のこと。

9) 食草

特定の昆虫類が好んで餌とする特定の植物。

10) 常緑樹（常緑広葉樹）

四季をとおして葉をつけている樹木。葉は厚く光沢があります。

11) 生物多様性

あらゆる生きものが、相互に関わりあいながら生きていること。

地球規模の生物多様性の保全と利用について約束した国際条約である生物多様性条約では、生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多様性の3つのレベルの多様性があるとされます。

12) 成虫

昆虫が十分に成長し、それ以上は成長しない最後の姿。

13) 接道部

敷地のうち道路（公道、私道の別を問わず、通常一般の通行の用に供される道、通路等）に接する部分。

【た】

14) 多年草

芽が出ると、何年も生育する草のこと。冬でも地上に葉を残すものや、地上部は枯れて地下茎（ちかけい）や根だけで冬越しするものがあります。

15) 天然記念物

文化財保護法で「学術上貴重で、わが国の自然を記念するもの」として指定されている動物・植物・地質鉱物、およびそれらの存在する地域。

16) 特定外来生物

外来生物（海外起源の外来種）であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすものまたは及ぼすおそれがあるものの中から外来生物法で指定された生物。植物については、栽培、運搬、保管、野外に植えること等が規制されています。

【な】

17) 二年草

発芽から開花・結実までに2年かかる植物のこと。

【は】

18) ヒートアイランド現象

都市部の気温が、その周辺より高温になる現象のこと。

19) 干潟

干潮時に海岸に露出する砂や泥がたまった所。満潮時には水に浸かります。ゴカイやカニなど多くの底生生物がすみ、それを食べるにシギやチドリといった多くの鳥が集まります。また、水をきれいにする働きも担います。

【や】

20) 幼虫

昆虫が卵から生まれて成虫あるいはサナギになるまでの段階。昆虫に限って使います。動物全般では、幼生（ようせい）と言い、卵からふ化した子が、親と違う形をしているときのことを指します。

【ら】

21) 落葉樹（主に落葉広葉樹）

葉の寿命が1年以内で、一般的には冬に一斉に葉を落とす樹木。落葉に先立って紅葉するものが多い。葉は薄く光沢がありません。

22) 緑化

土壌、その他の植栽基盤に樹木、地被植物、ツル性植物、草花等の植物を植栽し、育成すること。

23) 緑地

樹林地、草地、水辺地などが単独に存在し、あるいは隣接している土地と一体となり、良好な自然的環境を形成している土地。

24) 林床

林内の地表面のこと。

【わ】

25) 我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト

生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼすもの、または、そのおそれのある外来種のリスト。環境省および農林水産省により作成され、平成27年に公表されました。

【J】

26) JHEP（JAPAN Habitat Evaluation and Certification Program）ジェイハップ

（公財）日本生態系協会が行っている認証制度。事業実施によって得られる「将来50年間の自然の価値」が「評価基準値」を上回る場合、生物多様性の向上に貢献する事業、あるいは生物多様性への影響を与えない事業として認証されます。

